

漢字の造字法には、もう一つ、“形声文字”と呼ばれるものがある。漢字の造字法は、象形・指事・会意にこの形声を加へて四つあるのであるが、漢字はこの形声といふ造字法によってその数が著しくふえたのであって、漢字のおよそ九〇パーセントは形声文字なのである。

正に、形声文字が生れるまでの漢字は“文”であって、この“形声”といふ造字法が考へ出されたために漢字がどんどんと作られ、ふえて“字”と呼ばれるやうになったのである。

形声文字とは、「“形”と“声”との二つの部首の組合せに成る文字」といふ意味の言葉である。“形”とは“意味”のことを指して居り、“声”とは“発音”のことを言ったものである。会意文字が「意味と意味との組合せによって成る文字」であるのに対して、形声文字は「意味と発音との組合せによって成る文字」なのである。

例へば、“漢字”の“漢”が形声文字である。“氵”は、古い字形では“𣶒”となつてゐて、“水”といふ字の古い形と全く同じ形であったが、右の部分が省略されて今の形になったものである。この部首は、“水”を意味してゐて三つの点画から成つてゐるので“三水”と呼ばれる。

従つて、“漢”といふ字は「𣶒^{かんすい}水（𣶒といふ川）」といふ言葉を一字

に表現した文字であつて、今の“漢水”といふ川のことを表した字である。

“漢”の場合は、“氵”が意味を表し、“𣶒”が発音を表してゐるが、このやうに“扁”が意味を表し、“𠂔^{つくり}”が発音を表すといふのが“形声文字”の典型的なタイプである。

然し、“艱”といふ字のやうに、“𣶒”が扁になつてゐて、発音と意味とを表し、傍の“艮”が意味を表すやうな文字もある。この場合は、“会意”でもあり、“形声”でもあるから、“会意形声字”といふ言ひ方をすることもある。“形声文字”には、単なる“形声”よりも“会意形声”の文字の方が多い。

さて、それでは“川の名前”である“漢”が、なぜ、“漢字”といふ言葉に使はれてゐるのか、不思議に思はれる方が多いと思ふので、その由来を述べたいと思ふ。

御承知と思ふが、中国には揚子江といふ大河が西から東に向つて流れてゐる。昔は、単に“江”、または“長江”と呼ばれてゐた。

“江”は“工水”といふ意味の言葉を一字にした文字であることは、“漢”の場合と全く同じである。

この揚子江の支流で、その北の方をほぼ平行して流れてゐるのが“漢水”である。この漢水が揚子江と合流する“口”に在る都市が“漢口”

日本語の再発見

であり、その上流には“漢中”といふ都市がある。

昔、強暴な“秦”^{しん}といふ帝国を滅し、これに代って天下を統一した“漢帝国(西紀前二〇二年に建国し、二百十年を経て、紀元八年に滅亡した)”を打ち建てた“劉邦”は、この漢中を中心とする漢水の流域一帯を支配する“漢中王”から身を起した。それで、これに^{ちん}因んで、国名を“漢”としたのである。

秦の始皇帝は初めて古代中国を統一したので、それまで地方地方によってまちまちだった文字の字体を、“篆書”^{てんしよ}と呼ばれる書体に統一した。この字体は、今、実印の字体として用ひられてゐるものである。これに対して、漢王朝では、篆書よりも現在の“楷書”に近い字体である“隸書”^{れいしよ}といふ字体を作った。漢帝国は紀元八年に“新”の王莽によって滅亡するが、劉秀によって漢帝国は洛陽に再建される(紀元二五年)。儒学も盛んになり、紙の発明などもあって、現代の書体である“楷書”がこの時代に作られ、以後これが漢字の字体の基準になった。それで、これ以後の中国の文字はすべて“漢字”と呼ばれるわけである。